

スポーツ行為者及びスポーツ組織の構造的連関に関する研究： 日本サッカーを中心として

笠野英弘*

A Study of Structural Relationships between Character Structures of Players and Sports Organizations: Focus on Football in Japan

KASANO Hidehiro *

Abstract

Based on the concept that the social (institutional) structure created by sports organizations guides and shapes the character (psychological) structure of its players, the purpose of this study was to elucidate the characteristics associated with the institutional structure created by the Japan Football Association (JFA) by analyzing *JFA News* bulletins between 1978 and 2013, and to interpret both historical and structural relationships between the character structures of football players and the football institution in Japan by analyzing the life histories of two players.

By analyzing *JFA News*, our results suggested that the JFA was shown to have adopted a subjective stance in promoting both an improvement in performance levels and the acquisition of more highly skilled players. At the same time, by emphasizing their own authority, the JFA enhanced the players' sense of belonging or urge to belong to the organization. However, from 2006, the year the JFA Academy was founded, the JFA began to emphasize how playing football enables boys to become men and provides a meaningful way to make contributions to society. Also, by analyzing the life histories of two players, the findings suggested that football players in Japan place more emphasis on improving performance when under the influence of the institution created by the JFA.

Key words: institution, *JFA News* bulletins, life history

1. はじめに

現代のスポーツ実践は、「まさにスポーツの多様化時代を迎えている」²⁾が、「スポーツに熱中するあまり、遊びを忘れた極度の“勝敗主義”」⁸⁾がこれまで日本人のスポーツ観の特徴とされていたという歴史的背景や、国が高度化のためのスポーツに対して多くの予算を投入する^{註1)}ことなどから、日本におけるスポーツは、様々な志向のスポーツに比べて、高度化志向に偏重しているものとして捉えられる。このような高度化への偏重は、ドロップアウトやセカンドキャリア問題等^{9,10)}を生じさせている。

ここでは、これらの問題を、これまで焦点を当てられてきた学校運動部活動との関係ではなく、ス

ポーツ組織との関係に焦点を当てて検討する。それは、「訓練性の本質を有する教育＝体育」という「体育」概念から「娯楽性の本質で成り立つスポーツ」という今日的な「スポーツ」概念をスポーツ組織関係者が理解して実践していく必要性が指摘されている⁶⁾ように、教育としてのスポーツからの自立としてスポーツの問題を捉えていくことが求められているからである。

そこで、笠野³⁾は、公益財団法人日本サッカー協会（以下「日本協会」と略す）の競技者登録者と未登録のサッカー行為者を比較し、特に18歳から30歳代くらいまでの未登録の者（所謂草サッカー行為者）は、競技者登録者に比べてサッカー実施に

* 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

対して「不安感情」を抱きやすいことを示唆した。この不安は、高度化路線から逸脱・ドロップアウトしたと考えることによる劣等感や疎外感によって生成されるものと仮定し、笠野⁴⁾は、高度化志向というようなスポーツ行為者個人の価値観を、社会的構造から一般的に説明され得る「性格構造」として捉えた。そして、ガス・ミルズ¹⁾の理論に基づき、スポーツ組織がスポーツ制度を通してスポーツ行為者の性格構造形成に大きな影響を及ぼす可能性があることを、日本サッカーを事例として理論的に考察した。そこでは、未登録者は、日本協会が創り出している制度から外れることで、競技力向上という競争における「敗北」、日本協会という制度の長がもつ「威信」の喪失などにより、「不安」を惹起するようになる可能性が示唆された。

以上から、本研究では、日本協会（スポーツ組織）が創り出してきた制度的構造の特徴を機関誌から明らかにするとともに、その制度のなかのサッカー行為者（スポーツ行為者）はどのようにその制度の特徴を捉え、どのような性格構造が形成されてきたのかということライフヒストリーから解釈することを目的とする。

なお、機関誌分析を用いる理由は、日本協会は機関誌について、「協会は今、何を考え、何をしているか、将来へどんな展望を抱いているか—を中心のテーマにしていくつもりです」¹¹⁾と述べていることから、機関誌の内容を分析することにより、日本協会が主体的に形成してきた制度の特徴を理解することができるものとするためである。

2. 研究の方法

2.1 制度の特徴の提示方法

スポーツを制度として捉えた菊⁵⁾が設定した制度の局面を構成する6要素を援用し、機関誌分析からは、日本協会が創り出してきた制度的構造の特徴を、ライフヒストリー分析からは、対象者のサッカー行為を取り巻く制度的構造の特徴を明らかにする。菊⁵⁾(pp.33-34)が示した6要素の概要と、機関誌のテーマ・内容及びライフヒストリーからよみとるそれぞれの要素の具体的な内容は下記のとおりである。

①スポーツ・イデオロギー

スポーツ・イデオロギーは、「ある程度理念的に整序されているところの観念の形態及びその体系であり、より簡単に言えば制度を支える人々の考え方、それに対する意味、価値の付与の総体」⁵⁾(p.34)であることから、機関誌からは、日本協会が強調したと考えられるサッカーの価値や意義をよみとり、

ライフヒストリー分析では、対象者の語りから、サッカー行為者の考え方を示す^{注2)}。

②スポーツ・ルール

スポーツ・ルールは、「明示的なゲーム・ルールや黙示的なルール、組織に関連したルール（協会規約等）」⁵⁾(p.34)であることから、機関誌からは、日本協会が強調したと考えられるルールをよみとり、ライフヒストリー分析では、サッカーの競技規則だけではなく、サッカーを行ううえでのルール（例えば、遅刻をしたら試合に出場させてもらえないというチームの決まりなど）を示す。

③スポーツ・シンボル

スポーツ・シンボルは、「プレーヤーの知名度やチーム名、技術名称、儀式等に代表される記号的シンボル」⁵⁾(p.34)であることから、機関誌からは、日本協会が強調したと考えられる目指すべきサッカー選手像をよみとり、ライフヒストリー分析では、有名または目標とされていた選手、あるいは、サッカーにおいて夢や目標とされていたものを示す。

④スポーツ行動様式

スポーツ行動様式は、「スポーツ技術及びそれを高めるための練習方法、慣習的行為。教育局面としてのスポーツ技術の伝達行為をも含む」⁵⁾(p.34)としていることから、機関誌からは、日本協会が強調（推奨）したと考えられる練習方法や慣習的行為をよみとり、ライフヒストリー分析では、対象者がサッカーを実施する際の練習方法や慣習的行為を示す。

⑤スポーツ文物

スポーツ文物は、「スポーツで使用される一切の用具、施設、その他の物的条件」⁵⁾(p.34)であることから、機関誌からは、日本協会が強調（推奨）したと考えられる用具や施設等の物的条件をよみとり、ライフヒストリー分析では、サッカーをする際の用具や施設等の物的条件がどのようなものであったのかということを示す。

⑥スポーツ組織^{注3)}

スポーツ組織は、「スポーツ集団（クラブ、運動部、チーム）やそれらを統括するアソシエーション（協会、連盟、コミッショナー）等。尚、競技会（大会）は、地位—役割を付与されたプレーヤーによる集団間での組織的なゲームとして捉えられるので組織に含めて考えることにする」⁵⁾(pp.33-34)としていることから、機関誌からは、日本協会が強調したと考えられるクラブやチーム、協会、大会等の在り方や関係等をよみとり、ライフヒストリー分析では、対象者の語りから、サッカークラブやチーム、協会、

大会の存在とそれらの関係を示す。

2.2 機関誌分析について

定期刊行が始まった1978年から現在まで継続して発行されている「サッカー JFA news」(No.1～No.98)及び「JFA news」(No.99～No.340)から主なテーマを抽出し、それらのテーマが最も強調していると考えられる「制度を構成する要素」とその内容を取り上げた。

2.3 ライフヒストリー分析の対象者

問題意識だけでなく、ライフヒストリーという方法論の特徴にも留意し、M氏とS氏を対象者として選定した。M氏は、調査開始日現在30歳であり、子どもの頃から現在までサッカーを実施している。小学校から高校まで指導者に恵まれ、選抜チームでの活動が多い。また、Jリーグができたことにより、一時期、プロサッカー選手を目指していた。S氏は、調査開始日現在31歳であり、M氏と同様に、子どもの頃から現在までサッカーを実施してはいるものの、中学校では指導者に恵まれず、選抜チームでの活動もほとんどなく、プロサッカー選手を目指すこともなかった。

3. 結果と考察

3.1 機関誌分析

機関誌のテーマ・内容から、日本協会が主体的に創り出そうとしていた「制度を構成する要素」について考察すると、まず1978年から2013年まで、一貫して、サッカーは強化に価値がある（競技力が高い選手に価値がある）というスポーツ・イデオロギーを強調していた点に特徴がある。特に、1978年から2005年までは、日本代表や世界で活躍する選手・チーム等をテーマとして多く取り上げ、競技力の向上が重要であるというスポーツ・イデオロギーや、如何に競技力を向上させるかというスポーツ行動様式を強調していた。しかし、JFAアカデミー福島が開校し、JFAこころのプロジェクト推進室が設置された2006年からは、それまで強調されてきた要素に加えて、「こころの成長」、「人間的成長」、「社会貢献」、「フェアプレー」、「楽しさ」、「健全」、「リスペクト」など、サッカーは様々な価値をもたらすというスポーツ・イデオロギーを強調するとともに、サッカーを通して人間的成長やこころの成長を促し、社会貢献をするための具体的なスポーツ行動様式も強調されるようになった。また、スポーツ・シンボルとしては、日本代表選手や世界で活躍する選手に加え、Jリーグ開幕に向けた準備が始まった

1989年頃からプロ選手も強調されてきた。そして、制度を構成する要素としてのスポーツ組織については、日本協会の権威を向上させるようなテーマが多く取り上げられ、日本協会の権威が強調されてきたと考えられる。なお、スポーツ・ルールとスポーツ文物の要素については機関誌分析からは、特筆すべき点は窺うことができなかった。

以上から、特に2005年までは、より競技力向上志向の選手を育て、日本のサッカーを強くしていこうとする日本協会の主体的構えがあったこと、また、日本協会が、同協会に登録する選手等の帰属意識や帰属欲求を高めようとしていたことが示唆される。しかし、JFAアカデミー福島の開校、JFAこころのプロジェクト推進室の設置年である2006年からは、日本協会が、サッカーの高度化と普及（特に高度化への偏重）のみに重点を置いてきた組織から、人間的成長やこころの成長、社会貢献が大切であるというような、サッカーを通じた多様な価値を強調するとともに、社会に目を向けた組織としての存在に変わりつつあるといえる。

3.2 ライフヒストリー分析

M氏は、選抜チームなどでの活動を通して、S氏に比べて、日本協会が創り出す制度から大きな影響を受けたと考えられ、中学生や高校生の際に、スポーツ・シンボルとしてプロ選手や全国大会出場選手を目標とし、それに向けた競技力向上のための練習といったスポーツ行動様式などにより、勝利志向や競技力向上志向というスポーツ・イデオロギーが表れた。そして、真剣、真面目、競技力向上という語彙に代表される競技スポーツとしてのサッカーに価値があるものという性格構造が形成され、現在でもその性格構造を有している。一方、S氏は、小学生の際に、リフティングの上昇率を競う大会などを通して、比較的結果よりも過程が評価されるようなスポーツ行動様式や、競技力だけではなく休まず練習に参加することで試合に出場することができるというスポーツ・ルールなどにより、過程や努力に意義や価値があるというスポーツ・イデオロギーがあった。そして、小学校6年生のときにJリーグが開幕するが、プロ選手は目標ではなく、別世界の存在というスポーツ・シンボルとして捉えていたため、競技力が最も高いプロ選手を目指す（競技力向上を目指す）ことだけがサッカーではないという考え方がこのときに既に形成されていた点がM氏と大きく異なる点であると考えられる。この性格構造は、S氏が、中学生や高校生時代に、M氏と同じような制度の局面を構成する要素により、競

技力が高く勝利の価値が高いというような性格構造が形成された時期にも、明確に表には表れていなかったものの、同時に有していたと考えられる。また、S氏は、高校まで実施してきたような所謂競技スポーツとしてのサッカーは、高校卒業後は、プロ選手やプロ選手になる一歩手前の選手のみが行うものであり、それ以外は生涯スポーツといわれるような遊びとしてのサッカーを行うものであるという考え方をもっていたという点もM氏と比較した場合の特徴であると考えられる。

なお、両者に共通した点では、両氏とも、小学校高学年や中学生の始め頃に現在の性格構造を形成する礎が築かれたことから、この時期が性格構造を形成する重要な時期であると考えられる。

このような考察から、M氏のように、小学校高学年や中学生の始めの頃に、競技力が最も高いプロ選手を目指し（競技力向上を目指し）、真剣、真面目、競技力向上という語彙に代表される競技スポーツとしてのサッカーに価値があるものという一元的な性格構造が形成されたサッカー行為者は、中学生や高校生時代にその性格構造が強化され、高校を卒業してもその一元的な性格構造が保持されるものであると考えられる。一方で、S氏のように、M氏と同じような競技スポーツとしての性格構造は形成されるものの、競技力が最も高いプロ選手を目指す（競技力向上を目指す）ことだけがサッカーではないという性格構造も同時に形成された場合、中学生や高校生時代に、真剣、真面目、競技力向上という語彙に代表される競技スポーツとしてのサッカーに価値があるものという性格構造が強化されたとしても、高校を卒業すると、サッカーは遊びであるというような生涯スポーツとしての性格構造を有し、所謂高度化に偏重するようなことがないサッカー行為者になると考えられる。

4. おわりに

本研究では、機関誌分析から、日本協会が主体的に創り出してきた制度的構造の特徴を明らかにし、ライフヒストリー分析からは、サッカー行為者を取り巻く制度的構造と彼らの性格構造を解釈した。しかし、本研究では、日本協会が主体的に創り出してきた制度的構造の特徴と、ライフヒストリーから解釈したサッカー行為者を取り巻く制度的構造との繋がりが考察できていないことから、今後は、その繋がりを含め、制度を媒介とした日本協会とサッカー行為者の性格構造との関連を考察していくことが課題として提起される。そして、それらの関連が明ら

かになった場合、高度化の偏重によるドロップアウトやセカンドキャリア等の問題、サッカー行為者が抱く「不安」の問題等は、制度を主体的に制御し、改革し得る日本協会（スポーツ組織）としての問題として捉えていく必要があり、スポーツ組織をこのような視点で分析していくことが今後求められるようになるだろう。

5. 付記

本研究は平成24年度体育系研究プロジェクトの支援を受けたものである。また、本報告の一部は、体育・スポーツ経営学研究第27巻に掲載した原著論文に修正を施したものである。

注記

注1) 文部科学省⁷⁾によると、平成23年度のスポーツ関係予算は約228億円であり、その67.8%が競技スポーツ関連予算となっている。

注2) 菊⁵⁾ (p.33) は、スポーツ・イデオロギーについて、「分析のための段階的把握として、ここでは特定個人のもつ『考え方』のイデオロギー的性格を『信念』とし、特定集団のそれを『信条』とし、それらがスポーツ界全体に明示され得る段階にまで達したものを『イデオロギー』として一応区別しておく。しかし、イデオロギーの内容をその深部まで論じるためには、信条や信念に対する総合的な洞察が必要となってくるのであり、これらは区別されながらも、あくまで総体として捉えられなければならない」という。ここで、本研究において、日本協会が機関誌を通して示した考え方や価値観は、日本協会という特定集団の「信条」として捉えられるが、先に述べたように、加盟登録チーム数や指導者資格取得者数等を考えると、その「信条」がサッカー界全体に明示され得るものと考えられるため、「スポーツ・イデオロギー」として捉えることとする。また、対象となるサッカー行為者のライフヒストリーから導かれる考え方は「信念」として捉えられるが、その考え方（のイデオロギー的性格）が、特に、対象者特有の（特殊・特別な）考え方ではないと解釈できる限り、対象者を取り巻く制度の下では一般的に明示され得るものという「スポーツ・イデオロギー」として捉えることとする。

注3) 以下、制度を構成する要素として「スポーツ組織」という語を用いる場合は、ここでの定義を用いる。

文献

- 1) ガース・ミルズ：古城利明・杉森創吉訳（1970）：性格と社会構造。青木書店，東京。
- 2) 金芳保之（2004）：レジャーとスポーツ。（編）金芳保之・松本芳明「現代生活とスポーツ文化」，大修館書店，東京，14-20。
- 3) 笠野英弘（2010）：サッカーの愛好者と競技者の特性比較からみたサッカー市場の拡大に関する考察－スポーツ行動の予測モデルを用いて－。スポーツ産業学研究 20（1）：29-41。
- 4) 笠野英弘（2012）：スポーツ実施者からみた新たなスポーツ組織論とその分析視座。体育学研究 57（1）：83-101。
- 5) 菊幸一（1993）：近代プロ・スポーツの歴史社会学－日本プロ野球の成立を中心に－。不昧堂出版，東京。
- 6) 菊幸一（2013）：おわりに：3年次の研究成果と「スポーツ宣言日本」からみた日本体育協会の新たな方向性に向けて。（編）菊幸一「平成24年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅱ日本体育協会創成期における体育・スポーツと今日的課題－嘉納治五郎の成果と今日的課題－第3報」，公益財団法人日本体育協会，東京，90-96。
- 7) 文部科学省（2012）：スポーツ関係予算の状況について。文部科学省スポーツの推進に関する特別委員会（第12回）配付資料。http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo5/010/gijiroku/_icsFiles/afldfile/2012/02/07/1315797_4.pdf，（参照日 2012年6月14日）。
- 8) 山口泰雄（1988）：日本人のスポーツ観。（編）森川貞夫・佐伯聰夫「スポーツ社会学講義」，大修館書店，東京，56-67。
- 9) 吉田幸司（2008）：トップアスリートのセカンドキャリア。（編）トップアスリート・セカンドキャリア支援プロジェクト「トップアスリートのセカンドキャリア支援教育のためのカリキュラム開発（3）平成19年度報告書～日本型支援モデルの提案～」，トップアスリート・セカンドキャリア支援プロジェクト，東京，8。
- 10) 吉田 毅・山本教人・多々納秀雄（1999）：スポーツ選手のリタイアメントに関する社会学的研究。健康科学 21：69-75。
- 11) 鈴木武士（1978）：編集後記。（編）鈴木武士「サッカー JFA NEWS 第1号」，財団法人日本サッカー協会，東京，64。